米国で学ぶ小児医療政策 ー遅咲きの挑戦と日々の発見

Division of General Internal Medicine and Health Services Research,
David Geffen School of Medicine at UCLA (University of California, Los Angeles)

今西 洋介（いまにし ようすけ）

米国の小児医療政策を研究するため、2024年7月より
UCLAで研究中。三姉妹(13歳、12歳、5歳)の父。

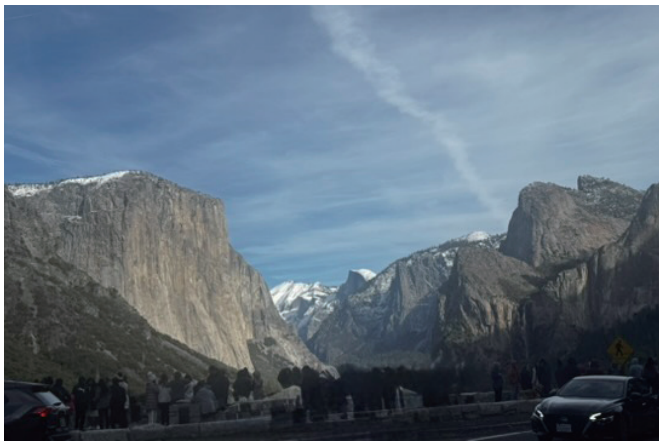
私は現在、University of California, Los Angeles（UCLA）の医療政策研究室でポスドク研究員として活動しています。日本では小児に関する医療政策が必ずしもエビデンスに基づいて決定されていない現状を痛感し、さらに小児医療政策の研究自体が十分に行われていないことを背景として、この分野を本格的に学びたいと思い渡米しました。実際、日本ではワクチンや学校保健の在り方などが場当たり的に決められることも少なくなく、医療政策の根拠をどう示すかという課題は未整備だと感じていました。

UCLA では、津川友介先生のご指導のもと、医療政策に関する研究を進めています。具体的には、研究資金を獲得するためのグラント作成のお手伝いと、自身の研究プロジェクトの二本柱で日々取り組んでいます。グラントの申請では、研究計画を練り、エビデンスを示すための文献整理やデータ分析の補助を担当しています。一方、自分の研究では、主に米国の小児保健医療政策がどのように策定・運用されているかを分析し、日本への示唆を得ることを目指しています。たとえば、全米の大規模データを用いて子どもの政策変更がどう子どもの予後に影響するか、保険制度の違いが子どもの健康にどのような影響を与えるかを検討したりするなど、多角的な視点で検証を重ねています。渡米後に最も苦労しているのは英語でのスピーキングで、研究仲間とのディスカッションや学会発表などでしっかり意見を伝えられるよう、日本にいた頃よりも必死に勉強を続けています。

UCLAの校門と就職初日の自分

さて、米国では政権が交代し、科学研究に対して抑制がかけられたり、科学が歪められたりするケースが報道されています。日本でいう厚生労働省にあたる機関のトップに、反ワクチン思想を持つケネディ氏が就任したと報じられ、自閉症の原因究明を改めて大きく取り上げるなど、政策が混乱し始めているように感じます。そのような不安定な状況に身を置きながら医療政策の研究をすることは、まさに生の社会動向を学ぶ貴重な機会です。同時に、米国の研究者達を見て痛感しているのですが研究者がただ研究成果を出すだけではなく、社会に向けて啓発活動を行ったり、必要とあらば声を上げたりすることの意義を痛感しています。政治と科学の間の距離が日本よりも遥かに近いですし、何より学術的な知見を社会の中で正しく活かすには、研究コミュニティと政策決定者、そして一般の人々との橋渡しが不可欠だからです。

異文化との触れ合いも、ロサンゼルスでの生活の大きな醍醐味です。中学生になる娘たちは日本人のほとんどいない現地校に通い、日本からしていたバスケットボールを通じて友人を作りました。彼女たちは日本人の仲間ともちろん交流しますが、日本語が話せない日系アメリカ人とも自然に打ち解けています。さらには生粋のアメリカ人とも一緒に練習や試合を楽しんでおり、その受け入れの柔軟さには感心しています。言葉や文化の壁



まるで絵画の中にいるようなヨセミテ国立公園の絶景

UCLAのシンボルであるロイスホール

に戸惑うこともありますが、スポーツを介したコミュニケーションは想像以上にスムーズで、子ども同士が多様性を自然に受け入れる姿を見るたびに、大人として学ぶところが多いと感じます。また、娘達のバスケチームの保護者で作る大人のバスケチームに参加させてもらい、私自身が 1 月から現地リーグでプレーさせてもらってます。2m 超えの黒人センターがチームメイトにいたり、米国人のボディコンタクトの強さを知り貴重な経験を積んでいます。

またオフには、カリフォルニアを中心に各地のナショナルパークを巡ることに夢中です。冬のヨセミテ国立公園では雪化粧の山の壮大さに圧倒され、デスバレー国立公園では灼熱の砂漠に息をのむような自然の厳しさを痛感しました。ジョシュアツリー国立公園ではキャンプに挑戦し、満天の星空の下で大自然の息吹を全身に浴びました。こうした経験は家族の絆を深めるだけでなく、自然保護や持続可能な社会づくりについて考えるきっかけにもなっています。日本でも国立公園はありますが、規模や風景、そして管理の仕方には大きな違いがあり、その壮大さに毎回新鮮な驚きを覚えます。

さらに、NBA や MLB の生観戦にもすっかり魅了されています。LA ドジャースの試合では、大谷翔平選手や山本由伸選手、佐々木朗希選手といった日本人投手たちが活躍する姿に誇りを感じます。LA レイカーズでは八村塁選手がチームに欠かせない戦力となり、UCLA の小児病棟にも彼らが表敬訪問に来てくれることがあります。日本人アスリートがここロサンゼルスで輝いている様子を見ると、同じ日本人としてとても励まされます。

また、子どもを育てる上での文化の違いも、日々の暮らしで強く感じます。特に驚いたのは、小さな子どもに対しても国籍や言語にかかわらず平等に接し、人権を尊重する姿勢が徹底されていることです。保育園の時から同意教育を受けたり、包括的な性教育が行われている点は、日本の状況と比べると衝撃的でした。娘たちもすでに「どんなバックグラウンドを持つ子も大切な個性がある」と自然に理解しており、こうした教育環境は将来の彼女たちの人間観に大きな影響を与えるのではないかと感じています。

私は現在 43 歳での留学という、かなり遅めのスタートでした。応募できる研究助成も限られているうえ、娘たちが大きくなってからの留学生活は円安とインフレの影響も重なり、予想以上に生活費がかさむのが現実です。それでも得られるものは非常に大きく、多少の苦労をしてでも挑戦する価値があると確信しています。もし可能であれば、若いうちから準備を進め、できるだけ早い段階で留学を始めるほうがベターと感じます。日本に戻ってからは、ここで培った研究手法や国際的な視野を生かして、小児医療政策におけるエビデンスの確立と発信に力を注ぎたいと思います。

今回こうして寄稿の機会をいただき、アメリカでの留学生活の一端をお伝えできることを大変うれしく思います。日本とは大きく異なる社会や政策の現場を肌で感じることで、多くの学びと驚きを得られます。今後もこの地で研究を継続するとともに、そこで得られた知見を日本の小児医療政策に役立てたいと考えています。研究者としての活動はもちろん、社会に正しい知識を伝えるための発信や啓発も怠らず、微力ながら医療政策の質を高める一助となれれば幸いです。